

銀 杏

発行所

〒792-0835
新居浜市山根町8番1号
曹洞宗瑞應寺専門僧堂
編集発行人 村上 徳 存
電話(0897)41-6563
FAX(0897)40-3127

毎月1日発行
(振替 01330-2-31918)
瑞 應 寺
印刷所 東田印刷株式会社

碧巖録物語独語【一】

後 堂 門 原 信 典

この度より、この誌面をお借りして「碧巖録」を読ませていただきます。およそ参考には程遠く、表題の通り「独語」。寝言に近い「独り言」ですが、お付き合いいただきますよう宜しくお願い申し上げます。

この「碧巖録」は正式には「佛果圓悟禪師碧巖録、師澧州夾山靈泉禪院に住して雪竇(重)頤和尚の頌古を評唱する語要」という長い名称で、この表題の通り、雪竇重頤禪師の頌古百則をテキストにして、圓悟克勤禪師が一定の様式を踏んで宗意を宣揚しようとしたものです。

この「碧巖録」は臨済宗では「宗門第一の書」と言われ

ています。

中国の景德年間(一〇〇四年)に成立した「景德伝灯録」という書物があります。これは過去七佛(お釈迦様とそれ以前に出現された六佛)から法眼文益禪師(八五〇九五八)までの千七百一人の修行の足跡、語録等を集めたもので「千七百則の公案」ともいわれています。

この「景德伝灯録」などの語録から百則を選ばれ、頌を付けられたものが「雪竇頌古」。この成立年代はよくわかりませんが、禅学大辞典の年表には一〇二六年に遠塵「雪竇(重)頤和尚明覚大師頌古集」を編纂とあります。

その後、圓悟克勤禪師(一〇六三〜一二三五)がこの「雪竇頌古」に垂示、著語、評唱を加えたものが「碧巖録」です。

次回読ませていただきますが「參学普照の序」には、「圓悟克勤禪師が雪竇頌古を弟子達の前で講じたものが集められ、南宋建炎二年(一二二八年)に圓悟禪師の弟子普照等の序文を付して世に刊行された」とあります。

無党と云う人の序にある宣和七年一二二五年の説もありますが、何れにしましても、祖録は時代を超えたお示し。それがどれだけ尊いか、お互いによくよく参究しなければ成りません。

道元禪師が中国の宋の時代に天童寺で如浄禪師に相見されたのが、宝鏡元年(一二三五年)乙酉夏安居、そして一二二七年に道元禪師が帰朝される時に「碧巖録」を入手し八十則まで写され、残りを「白山権現」或いは大権修理菩薩とも)助力を得て一夜の内に書写し終わったとされます。此の実物をご覧になられた方が「あれ(助力の部分)」は、中国人の手

並みじや。」と言われている。だが、現存する最古の写本「二夜碧巖」と云われる「佛果碧巖破関撃節」です。

この碧巖録の第二則趙州至道無難の評唱の最後のほうに圓悟禪師は百丈禪師の「一切の語言と山河大地を、一一転じて自己に帰す」という言葉を引き「雪竇は凡そ一拈一掇するに、末後に至つては須く自己に帰す」雪竇禪師は古則を練りに練って様々に吟味しているが、最後は必ず自分自身に回帰させている。とお示しです。

これは私たちの読み方もそうあるべきなのです。必ずそれぞれが自らの「自己に帰して」つまり「古教照心」を心がけて参究する事を要求されます。

それがまた「祖録は生き物」である所以でもあります。

雪竇禪師は実に詩才といつか文才に長けた方で、十翰林の才があると云われています。

翰林は文学の林という意味で、翰林学士は今で言う文学博士、それを十も持っているような文章の優れた人という

事です。

雪竇は住持されたお寺の名前、諱は重頤、明覚大師と諡されています。元は四川省の人です。

二十四歳の時に出家されて、湖北省東北部の随州、智門寺の光祚禪師の法を嗣がれます。天性の詩人であつたので諸国を行脚していました。ある時、詩人仲間である曾会という人が「是非杭州へ行け」とすすめます。

杭州は海外貿易港として栄え、国際都市として発達しました。現在でも大変景色の良いたところだそうですが、禅の盛んなどころでもありました。曾会が「杭州の靈隱寺という寺がある、紹介状を書くからそこへ行け」といわれて、詩人であり役人である曾会の紹介状を持って靈隱寺に行かれました。

三年ほどして曾会が靈隱寺にやつてきて住職に「ここに重頤という坊さんがいるはずだが」住職は「そんな奴はいない」と言う。「そんなことは無い、私はあなた宛の紹介状を持たせてここに修行に来させたはずだ」

と曾会。住職は「いやそんな紹介状をもらった覚えは無い」

そこで千人ほどの雲水の名簿を調べたところ、重顕和尚はちゃんと居た。

そこで呼び出してもらって曾会が「紹介状を渡したのに何故出さなかったか」と尋ねると、「わしは修行者だが、郵便配達人では無い」と重顕和尚は懐からその紹介状を出して返したという事です。世間

テレホン法話 〇八九七 四一〇三三

禪のたより



◆ 時に勤めて払拭せよ

コロナ禍では感染の問題だけでなく、残念なことに差別や偏見という問題も深刻さを増しています。感染者を責める風潮や医療従事者への不当な差別などを受けて、政府をはじめ様々な機関や団体が、コロナ差別をなくすためのメッセージを発信しています。

「恐れるべきはウイルスであり人ではない」とよく言われますが、過剰に恐れ、遠

では、ともすれば人を頼って、手づるを求めて右往左往しますが、そういう世間的な駆け引きを一切されない姿がうかがえます。

のちに洞底湖の翠峰寺に住職されます。この洞底湖も非常に風光明媚な所だったのだ大いに詩心を養われた。

そして浙江省明州の雪竇山資聖禪寺に三十年住されて遷化されました。(続く)

ざけようとする心が差別につながっているように感じます。クラスターが発生した場合所へは多数の電話やメールが寄せられ、中には脅迫的な内容もあると聞きます。外出を自粛するなど我慢の程度が強い人ほど、自分の判断や行動が多くの人と共通していると思ひ込みすぎる傾向があるようです。

日本赤十字社は、『過剰な不安や感染者達への偏見、差別も一種の感染症である』と位置付けています。かく言う

私も、テレビで三密の状況が流れる映像を見てやるせなさを感ずることがあります。行動を自粛しない人や休業要請に応じない店舗へ憤りを感じたりすることもあります。こういった感情は、新型コロナウイルスの病気のそのものでなく、不安や恐れ、嫌悪・偏見・差別という感染症にいつの間にか罹患していたということになりますね。

中国の唐の時代の僧侶である神秀の詩の一節に『時に勤めて払拭せよ』という言葉があります。「人間はもともと鏡のように綺麗な心をもっているのだが、日々の暮らしの中で知らず知らずのうちに煩惱にまみれ、曇ってしまう。鏡を磨くように、いつも心の曇りを拭き磨いていかなければならない」という意味です。部屋や台所やトイレなど、毎回するならば少しの掃除で綺麗になるのに、それを疎かにして大変な思いをするというようなことは誰しも経験があるのではないのでしょうか。

連日トップニュースで新型コロナウイルスに関する内容

が報じられています。「昨日の県内の感染者数は〇〇人だった」という会話が職場や学校で日常的になりました。何気ない話題の中に、差別や偏見という排他的な考えが含まれていないでしょうか？ 正確な情報に振り回されていないでしょうか？ 医療従事者や事態に対応している全ての人に対する敬意や、自宅待機をしている人に対する思いやりを忘れていないでしょうか？

『時に勤めて払拭せよ』毎日心を磨き続け、曇りや汚れを溜めこむことなく、綺麗な見方と考え方ができるような常々に心掛けたいものです。

愛媛県法蓮寺 川本哲志師

令和三年十月十一日〜二十日

◆ 生を明らめ 死を明らむ

曹洞宗の中心的な教えを説いた經典である『修証義』の冒頭に、「生を明らめ、死を明らむるは仏家一大事の因縁なり」とあります。生(しょう)という字は生きると書きます。「生」とは何か、「死」とは何かを究めていくことが、

生きる上において最も大切な課題である、という意味です。哲学的で難しい内容ですが、最近この、生きることと死ぬことについて深く考えさせられる出来事がありました。

私が住んでいるお寺の近所に一人暮らしをされている九十歳のおばあさんがいます。数年前から認知症が見られるようになり、年齢的にも一人での生活は無理だろうと感じられます。しかし、息子さんが一緒に暮らすと説得しても、「自分の家から出たくない」と頑なに拒否されるので、家族や親せきの方が頻りに様子を見に行ったり、介護支援を最大限に利用したりしておばあさんの望む、家での暮らしを支えています。

ある日の夜遅くに、私が車でお寺に帰っていると、ヘッドライトが照らした畑の中に作業着を着て鋤を持っているおばあさんの姿が見えました。私は慌てて車から降りて「もう真つ暗なのに、こんな時間に畑仕事しよるの?」と声をかけると、「そうよ、私がやらんと誰もやる人がおらん

けんな。」と答えが返ってききました。認知症が進行しているのだからかと心配しながら、おばあさんを家まで送っていき、翌朝、様子を見に行く元気そうにしていたので安心しました。「もう九十歳なんやけん、無理せずのんびりしてたらええよ。」と声を掛けましたが、それから後も、畑に出て草を引き、鍬で耕すおばあさんの姿をよく見かけます。

無理をせずには言ったものの、おばあさんが畑仕事をやめてしまえば家の周りの田畑はすぐに荒れ地になってしまうでしょう。あの夜の「私がやらんといかん」という言葉に、受け継いだ田畑と家を守るのだというおばあさんの強い意志を感じますし、その思いが生きる支えになってくれるのでしょうか。

私たちは皆、早い遅いの差はありますが、生まれたからには必ずその命の終わりを迎える時がきます。それなのに、今日が終れば明日が来る、明後日も来ると思ひ込んでいないでしょうか？毎日を何気なく過ごしたりしていないで

しょうか？

おばあさんの畑は耕して手入れされた面積が毎日少しずつ広がっていきます。それを見るたびに私は、より良く生きていくことの大切さを感じます。今日という一日、今という時間、目の前のことに最善を尽くし、大切に生きていこうと励まされています。

「生を明らめ、死を明らむるは仏家一大事の因縁なり」とは、自分に与えられた命を全うするために、今なすべきことを明らかにしていくことだと、お婆さんの畑から教わっているような気がします。

愛媛県法蓮寺 川本哲志師
令和三年十月二十一日～三十一日

◆感謝の心

ご法事などでよくお唱えする修証義というお経の一節に、病氣になった雀を、少年が救って育てる話と、子供にいじめられていた亀を、旅の若者が助けて河に放す話が出てきます。雀は少年のもとで回復し寿命を全うしてその後、仙女の使いに生まれ変わるとなり、成長した少年のもとにお礼に現れます。

また、旅をしていた若者は、数十年後にとある功績を認められ余不亭という街の知事に任命されます。その街は昔旅の途中で亀を助けた地で、自分が知事に任命されたのは、その亀の報恩による因縁かもしれないと感じ入るのでした。修証義ではこれらの中国の故事を引き合いに、動物でも恩返しをすることがあるのに、私たち人間は感謝の心を忘れやすいものだと諭されています。

そう言われると、自身を顧みるべきなのですが、何故か飼っている猫のことを思い浮かべてしまいます。はじめは、お寺の在る山を散歩していると時々見かける、逃げ足の速い野良猫でした。ある時、その猫が怪我をしていて不思議と逃げずに病院に連れて行くことが出来て、それから何となく餌や薬をやってお世話をするようになりました。放し飼いの猫なので、お腹が空いたときは寄ってくるのですが、あとは気ままに過ごしています。当然、お盆やお彼岸など猫の手も借りた時でも、まったく意に介さずゴロゴロ鳴くだけで、昔話のよ

うな猫の恩返しというような気配は全く感じられません。感謝は自分が気持ちで表すものなので、されるのを期待しても無駄なのではないでしょうか。

ところで、感謝の心は孝順心とも言います。一般には「親に孝行を尽くし、その意に柔順であること。真心をこめて親につかえること。」で、修証義には、「今日の私たちが、正法に会うことが出来るのは、過去の仏祖方が身命をなげうって如法の行持をなし、断絶させることなく伝えられたお蔭であり、その恩に対する報恩行は、孝順心によってなされる。」と説かれていきます。如法の行持とは、道場での修行のことであり、伝えられた修行を脈々と持続させていくことが、そのまま報恩の行ということです。

そして、その報恩行が孝順心によってなされる

白眉殿進捗状況

写真の通り工事が進んでおります。



のであれば、私たちは感謝の心によって修行させて頂いていくことになります。

今月中旬から瑞應寺でも冬制中という正式な修行期間が始まります。留守番をしてくれる猫に感謝して、雲水さん方と一緒に修行させて頂きます。

瑞應寺専門僧堂 維那 吉松聖博
令和三年十一月二日～十日



■白眉殿上棟式

十一月四日(木)、白眉殿の上棟式を金岡監録導師のもと厳修された。



白眉殿上棟式

■達磨忌

当山では十月の第一日曜日に住友供養が行われる為、今年には月遅れの十一月五日(金)に、門原単頭導師のもと達磨忌正當献供、前晚に、越海講師導師のもと速夜特為献湯が厳修された。



達磨忌 (拈香法語)



達磨忌 (出班焼香)

■金毘羅上殿祈禱

十一月十四日(日)(旧十月十日)は毎年恒例、当山鎮守金毘羅大権現様の秋大祭日。今回も春大祭と同様、新型コロナウイルス感染拡大防止の為、邦楽奉納、催し物等は中止。山主導師のもと、一山大衆、役寮、総代様のみで上殿、大般若祈禱を厳修。山内一同、当山檀信徒他、苦難に向かわれているすべての方々の御心が少しでも和らぐことを祈った。



金毘羅殿

■冬安居入制

十一月中旬恒例の佛國山冬安居入制の諸行持を厳修。十八日は配役行茶、首座入寺式、土地堂念誦、十九日は小参、人事行礼等。今冬首座山内浩紀(慧岳)(広島県光福寺山内博道老師徒弟)以下大衆皆共に弁道安穩、和合精進を念ず。



小参



巡寮



土地堂念誦

十一月の日鑑

一日	祝禱
四日	達磨忌速夜諷經
五日	達磨忌正當諷經
九日	参玄会(十一日迄)
十四日	金毘羅秋大祭
十五日	祝禱・略布薩
十八日	観音講・勉強会
十八日	配役行茶・入寺式
十九日	土地堂念誦庫司点湯
廿一日	小参・人事行礼
廿一日	太祖降誕会
廿四日	自彊金盃友会秋季法要
卅日	略布薩

十二月の予定

一日	祝禱
五日	臘八摂心(八日迄)
八日	日曜参禅会
八日	成道会
九日	断臂摂心(十日迄)
十日	震旦三祖忌
十五日	祝禱・略布薩
十八日	観音講・勉強会
十九日	ベルモニー合同慰霊祭
廿九日	餅つき
卅一日	略布薩・除夜

銀杏感謝録

島根県	浄心寺 殿
愛媛県	大字堂眼鏡店 殿
福井県	妙徳寺 殿
広島県	長全寺 殿
茨城県	阿野仁 殿
大分県	浄土寺 殿
当山	照心会 殿

(令和三年九月十三日受付迄)



鐘 声

中国唐代の禅僧、無業禪師の言葉に「莫妄想」(妄想する莫れ)という言葉があります。妄想とは、人間がいくら考えてもわからない問題を考えることで、莫妄想とは、そんな事を考えるなということです。今年の冬制中は、上山して、約半年が過ぎ、まだ、思うように行かない事が多々あると思います。莫妄想、余計なことは考えず、今の自分に出来ることを実践していきたいと思います。今冬首座の配役を頂き、まだまだ未熟者ですが、この任をしつかり勤めあげられるよう弁道精進していきたいと思います。

今冬首座